
Emblem of Story **紋章物語**

杏子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Emblem of Story 紋章物語

【Nコード】

N0769Z

【作者名】

杏子

【あらすじ】

時空の扉を越えて、数々の仲間が集まるファンタジー小説。「ファイアーエムブレム」の歴代シリーズから、数々の仲間が集い、主人公たちと出会い、そして共に戦う。

時空を越えた出会いが、歴史を変える。

Prologue? 扉を越えて（前書き）

一人の青年が故郷から別天地へ目指す。

しかし、その途中に不思議な大きな扉を発見。その扉には取っ手が付いておらず、開けたくても開けられなかった。

・・・しかし？

Prologue? 扉を越えて

【Prologue 扉を越えて】

「お兄ちゃん、本当に行くの?」

一人の青年の脳裏に、今までずっと傍にいた妹の声が過ぎ^よった。

彼は今まで過ごしてきた砦に背を向けて歩き始めようとした。しかし、最後に顔だけを砦に向け、そして何も言わずにその場から去って行った。

そして青年は森道を一人歩く。ずっと道が続く中、彼はふと視線をずらした。

「・・・何だ?」

彼はある物に気が付いた。木々の間から、うつすらと見える銀色の何かを見つけたのだ。

青年はその銀色の何かに向かって走り出した。

青年は銀色の何かがある場所まで辿り着いた。

「これは・・・、扉か?にしても大きすぎる・・・。」

青年の前に聳^{そび}え立つ1つの銀色の大きな扉。その扉には不思議な紋章が描かれている。

「しかし、取っ手が無いな。どうやって開けるんだ?」

彼は扉を探り始めた。そしてあることに気が付いた。

「そういえば、裏側を見ていなかったな。」

青年が扉の裏側に回りこもうとしたその時。なんと、扉が「キィッ」と音を立って開き始めた。

「!?!」
青年は驚き、扉が開く様子を凝視していた。そして扉が全開した。
「な、何だ、この扉……。」
彼は扉の奥から不思議な力を感じていた。それだけではなく、人の気配も感じ取った。
「誰だ……?奥から人の気配を感じる。」
青年は吸い込まれるようにその扉の奥へと足を運んだ。

「……!?!」
青年が扉を潜くぐった先は、見知らぬ場所だった。
「何だ、ここは……?」
彼はふと、後ろを振り返った。後ろには先程潜ってきた扉と全くデザインの扉が立っている。だが、扉は閉まっていた。
「戻れないのか……?」
青年は扉を調べたが、開く気配は全く無い。
「参ったな……。」
彼が頭を抱えていると、背後から声が聞こえた。
「……そこで何突っ立ってんだい?」
「?」
青年が後ろを振り返った。そこには赤い髪の女性が立っていた。女性性は弓を背中に提げている。
「あんた、その扉を潜ってきたんだらう?」
「ああ、そうだが?ここは一体何処なんだ?」
青年の質問に女性がこう答えた。
「ここはルナティア城だよ。まあ、扉を潜ってきたばかりのあんたには分からないだらう?」
「……ここはテリウスじゃないのか?」
彼の問いに、女性はこう言った。

「残念だけど、違うね。とりあえず陛下に会って話を聞いたほうがいいだろうね。ついて来な、案内するよ。」

「……。」

女性が手招きするが、青年は混乱しているらしく、微動だにしない。

「一応自己紹介しておくよ。私はアルテナ。アルテナ・アーネストさ。ここの城で將軍をやってるよ。ちなみにあんたは名前何てんだい？」

「俺はアイク。グレイル傭兵団の団長だ。」

青年アイクはアルテナと名乗った女性から名前を聞かれたので答えた。

「それじゃあアイク、ついて来な。案内するよ。」

「……そうだな、とりあえず頼む、アルテナ將軍。」

アイクは決心が付いたのか、アルテナについて行くことにした。

アイクとアルテナの2人は大きな扉の前に着いた。

「……この先に陛下が居るよ。所でアイク、あんたはいつもその口調かい？」

「ああ、皇帝の前でもこの話し方だ。礼儀は苦手だな。」

アイクの言葉に、アルテナはこう言った。

「なら私が彼に話しておくよ。とりあえずそれまでは黙っててくれるかい？」

「分かった。」

アルテナが彼の言葉に頷くと、扉の前で「アルテナ・アーネスト、入るよ!」と叫んだ。すると、中から男性の声が聞こえてきた。

「アルテナか。分かった、入るといい。」

その声が聞こえると、アルテナが扉を開いた。そして2人は扉の奥の部屋へ足を進めた。

「陛下、今いいかい？」

「ああ、構わない。」

アルテナは今までとは変わらない口調でルナティア国王と話している。

「陛下、彼は礼儀が苦手らしく、敬語を話さないけど大丈夫？」

「問題ない。私はルナティア国王のシルヴァス・マーヴェリックだ。君の名前を聞こう。」

ルナティア国王シルヴァスが聞いた。

「俺はアイク。傭兵団の団長をやっている。」

アイクは玉座に座るシルヴァスを見て言った。すると、アルテナがこう口を開いた。

「アイクは『時空の扉』を潜ってきたんだよ。」

「何!？」

アルテナの言葉に、シルヴァスは驚いて立ち上がった。アイクは話がついて行けないのか、キョトンとしている。

「ああ、アイクはまだ知らなかったね。『時空の扉』って言うのは、さっきあんたが潜ってきたあの扉のことだよ。」

「そうだったのか……。」

「しかし、まさか時空の扉が動き出すとはな……。」

シルヴァスの表情が突如険しくなった。国王の様子を見たアイクが彼にこう聞いた。

「ルナティア国王、何か不味い事でもあるのか？」

アイクがそう言うと、シルヴァスがこう聞いた。

「アイク、落ち着いて聞いてくれるか？」

「ああ、何だ？」

アルテナの表情も変わっており、険しくなっていた。

「……君の故郷で、直に災いが起こるかもしれない。」

「災い……?」

アイクは頭上に「？」を浮かべた。すると、アルテナが口を開いた。「……つまり、近いうちに良くないことが起きるかもしれない」

だよ。もしかすると、あんたの傭兵団の仲間が危ないかも知れない。

「何だと!?!」

アルテナの言葉に、アイクは驚いた。そして「すぐにテリウスに戻る!」と言い、玉座の間を出ようとしたが、アルテナが「無理だね。今すぐには戻れないよ。」と言った。

「どういうことだ・・・?」

アイクの台詞に、シルヴァスがこう答えた。

「時空の扉は、空間が歪んだ時に開く扉でな、扉が開いたということとは、空間が歪んだ証拠であり、災いを知らせる扉でもあるのだ。」

「・・・。」

シルヴァスは話を続ける。

「その災いの殆どは、扉を潜った先の世界で起こっている。」
彼がそう言つと、アルテナがこう言った。

「この周期だと次は5日後ぐらいだろうね・・・。」

アルテナの言葉に、アイクは落ち着いてなかった。しかし、シルヴァスはこう言った。

「しかし、災いとは言え、過去では誰も犠牲者が居なかったな。」

「?この現象は今回が初めてではないのか?」

アイクがそう言つと、シルヴァスがこう答えた。

「ああ、今回が初めてではないのだが、災いとは言っても、不思議なことに犠牲者が居ないのでね。」

彼の言葉に、少し落ち着いたアイクだった。

「そうか・・・。」

すると、アルテナが「とりあえずアイクの部屋を用意させた方がいいんじゃない?」と言った。彼女の言葉にシルヴァスが「そうだな。」と言った。

「それじゃあ部屋はリオンに任せとくよ。」

アルテナがそう言うなり、2人は玉座の間を後にした。

Prologue? 聖騎士、登場（前書き）

青年アイクは『時空の扉』を潜り、『ルナティア』と呼ばれるところに来た。

そこには、ルナティア將軍であるアルテナ・アーネストがいた。彼女の案内で国王シルヴァス・マーヴェリックの元へ。

彼に事情を話したアイクだが、国王の言葉から「直に災いが降りかかるだろう」と予言される。

仲間に迫る危機、それを悟ったアイクは故郷に戻ろうとするが、5日過ぎないと戻れないことが発覚。

彼はそれまで城に居候することとなった。

Prologue? 聖騎士、登場

【Prologue? 聖騎士、登場】

「・・・あ。」

アルテナがふと足を止めた。

「どうしたんだ？アルテナ將軍。」

その後ろにはアイクの姿が。

実は今、アルテナはアイクを連れて城内を案内しているところだった。

「そういえばリオンは訓練があつたねえ・・・。」

アルテナが頭を掻いた。

「・・・ところで將軍、『リオン』って誰なんだ？」

アイクは先程から彼女が口に行っている『リオン』という名前が気になっていた。

「ああ、あとで紹介するつもりだったけど、リオンって言うのは娘の名前だよ。」

「將軍には娘が居たのか。」

アイクがそう言うと、アルテナが「仕方ない。」と首を振り、こう言った。

「部屋の手配はリオンじゃなくて、別の誰かに頼みますか。」

アルテナがそう言うと、再びアイクを連れて城内を案内し始めた。

「・・・勝者、リオン！」

騎士団の訓練所では、訓練が行われていた。今は模擬戦が行われている。

「あー、やっぱりリオンは強いな。」

「俺さ、リオンがトップになるべきだと思うんだよな。」

「でもさ、リオンってずっと首横に振ってたんだろ？」

「きつと俺たちにチャンスをくれてるんだよ！頑張ろうぜ！？」

騎士たちの間でそんな会話が飛び交っていた。

「よし、次はお前たちの組だ。リオン、お前は下がっていいぞ。」

「はい。」

彼女がリオン。リオン・アーネスト。ルナティア聖騎士団に所属する女性騎士だ。

すると、一人の騎士が慌てた様子で騎士たちに近づいた。

「た、大変だ！！」

「？」

リオンは訓練用の剣を片付けに行こうと、騎士舎に向かおうとしたが、慌てた様子の騎士のところへ向かった。

「・・・おい、どうしたんだよ？」

一人の騎士が、慌てている騎士に話しかけた。

「じ、時空の扉が・・・開いたんだとよ！」

「!？」

彼の言葉に、騎士たちの間に沈黙が走った。

すると、「お前たち、どうしたんだ？」という声が聞こえてきた。

リオンを含む騎士たちが後ろを振り返ると、そこには剣を背に提げた男性が立っていた。

「ケルビム將軍！」

「どうしたんだ？」

先程の慌てていた騎士が、將軍に近づいてこう言った。

「実は、時空の扉が開いたとの報告がありました。」

「扉が？開いたのか？」

ケルビムがそう言うと、騎士が頷いた。嘘ではないと確信したケルビムが、騎士たちにこう言った。

「皆、よく聞くんた。扉が開いたということは、近いうちに扉の向

こうで災いが降りかかる。もしかすると、既に災いが起こっている可能性が高い。・・・そこで、俺とアルテナ、そして騎士団の中から選抜した者を扉の奥の世界に向かわせる。」

「!？」

騎士たちは彼の台詞に驚愕した。

「そうだな・・・。」

ケルビムは騎士たちの顔を見回した。そして視線が誰かと合った。

「よし、リオン、お前にしよう。」

「!」

リオンはまさかと思い、彼の傍まで近づいた。

「皆、今回の調査は俺とアルテナ、そしてリオンと向かうことにする。異議ある者は？」

彼の言葉に誰も異議は無く、全員で「異議なしです!」と言った。

すると、リオンが彼にこう聞いた。

「將軍、私でよろしいのですか？」

「いいから選んだんだろう。」

「・・・。」

ケルビムのあつけない答えに黙り込んでしまったリオン。

「リオン、あんたなら出来る!」

「俺たちはいつでも帰りを待ってるぜ!」

仲間たちの励ましを受け、リオンは頷いた。

「・・・必ず戻ります。どうか、その間姫をよろしくお願いします。」

「

彼女は仲間たちにお辞儀をした。そしてケルビムが「準備して玉座の間に来い。」と言った。リオンは頷き、訓練所を後にした。

「さて、城の案内はこれぐらいだったかな。」

アルテナとアイクは城内を歩き尽くした。

「ルナティア城は広いんだな。・・・迷いそうだ。」

彼の言葉に。アルテナが軽く笑って言った。

「大丈夫さ、その内慣れる慣れる！」

そう言うなり、アイクの肩をポンポンと叩いた。すると、「アルテナさーん！」と手を振りながら誰かが走って来た。

「ああ、ルーシア、部屋の準備は終わった？」

「終わったわよー。」

「ありがとさん！丁度あんたがいて助かったよ。」

アルテナがそう言うと、ルーシアは「こんなの朝飯前よ！」とピースして言った。

「・・・。」

アイクは陽気な女性を見つめていた。すると、アルテナが「紹介するよ。」と言った。

「彼女はルーシア。ルナティアの情報屋だよ。」

「情報屋？」

「そうよ。私は各地の情報を集めては、皆に話してるのよ。もちろん、扉が開いたことももう皆知ってるわ。」

ルーシアがそう言った。すると、彼女が「これからよろしく、アイク！」と言い、彼女は何処かへと走って行った。

「まあともかく、次は城下町を・・・。」

アルテナとアイクが城を出ようとしたその時だった。

「アルテナ將軍！」

誰かに呼ばれたアルテナはふと振り返ると、そこには一人の女性が立っていた。

「おや、姫さんじゃないか！」

「姫・・・？」

アイクが女性を見て言った。

「お父様がお呼びです。既にケルビム將軍が玉座の間にいらっしやいます。」

「・・・どうやら一仕事来そうだね。所でリオンは？」

「リオンもいます。」

「分かった、今すぐ行きたいところだけど……。」

アルテナがアイクを見た。すると、『姫』と呼ばれた女性は「私が城下町を案内します。」と言った。

「それじゃあ、お願い出来るかい、姫さん？」

「はい、お任せ下さい。」

アルテナがそう言うと、急いで玉座の間へと走って行った。

「……あんだ、この国の姫なのか？」

「はい。ルナティア王女のアスカ・マーヴェリックと申します。」

アスカと名乗ったルナティア王女アスカはアイクにニコツと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0769z/>

Emblem of Story 紋章物語

2011年12月3日17時48分発行